本明川における住民団体の
コロナ禍前後での活動状況について

田原　まゆみ[1]・亀谷　一郎[1]

[1]九州地方整備局　長崎河川国道事務所　諫早出張所　（〒854-0011 長崎県諫早市八天町20-15）.

新型コロナウィルス感染症の対策に伴って本明川を利活用している住民団体等の活動は大きく影響を受け、中止や規模縮小を余儀なくされている。今回はコロナ禍前後で住民団体等の活動がどのように変化したのか、各団体がコロナ対策を踏まえながら一歩ずつ活動し始めている状況をその具体例も含めて紹介する。

キーワード　コロナ禍，住民活動，コロナ対策，住民連携

1. はじめに

本明川は市街部の散策路や河川敷及び干陸地を中心に市民の貴重な水辺空間として広く親しまれており、幹川流路延長28kmと全国の1級河川でも短い河川でありながら年間の河川利用者は34万人と多い。そして本明川で活動する住民団体等も50を超えており、各団体の活動も活発に行われている。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の対策に伴いこれら住民団体の活動は大きく影響を受け、中止や規模縮小を余儀なくされている。そこでコロナ禍前後で住民団体等の活動がどのように変化したのか、またコロナ禍でも実施された住民活動はどのようなものがあるのか具体例も含めて紹介する。

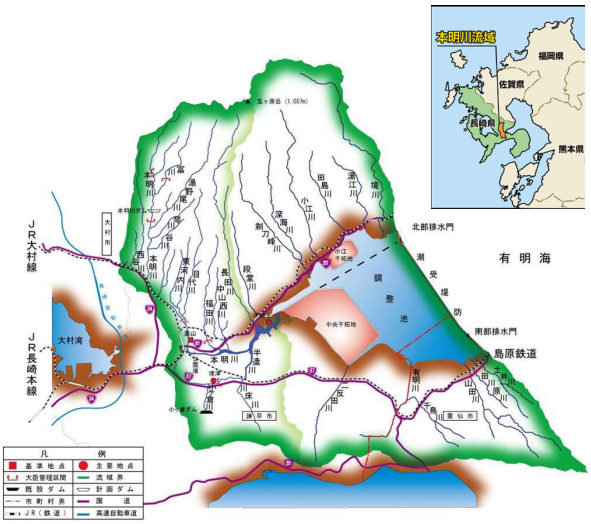

図-1　本明川流域図

2. コロナの感染状況と住民活動状況の推移

長崎県内では2020年3月に初めてコロナ感染者が確認された。その後2020年以降は感染者数が急激に増加し、長崎県でも2020年4月以降2度にわたり緊急事態宣言等が発令された（図-2）。この感染症予防対策としての行動制限に伴い、本明川における住民活動も大きく制限を受けた。

近年の本明川における住民活動の主なイベントの開催状況をまとめたものを表－１に示す。2020年度は通常どおり開催されたイベントはなく、今回取りまとめた全15件中、中止されたものが10件、一部開催となったものが5件であった。また2021年度は若干回復し、通常開催が3件、一部開催が5件、中止が7件であった。これらのことから2019年度1月まで開催されていたイベントがコロナウイルスのまん延に伴い、中止や規模縮小を余儀なくされているといった状況が伺える。

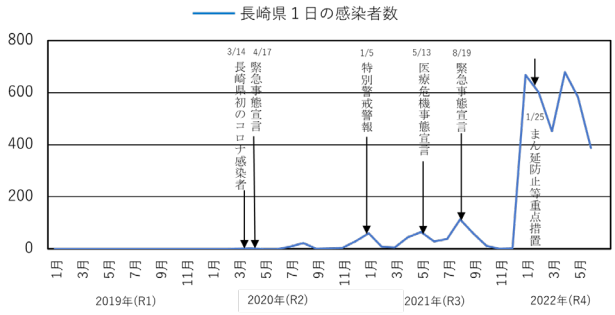

図-2　長崎県の新型コロナウイルス感染者数の推移[1)]

表-1　近年の本明川における住民活動の主なイベントの開催状況

開催月	行　　事	2019年度(R1)	2020年度(R2)	2021年度(R3)	2022年度(R4)
4月	桜づつみをきれいにせんば	○	△	△	△
5月	ソニー春の美化活動	○	×	△	△
6月	本明川交流会の集い	○	×	×	△
7月	しじみの放流	○	△	○	○
7月	本明川をきれいにする集い	○	×	×	×
7月	諫早大水害を語り継ぐ	○	×	△	△
7月	諫早万灯川まつり	○	×	×	×
7月	魚つかみどり大会	○	×	×	―
7月	コスモス種まき体験	○	△	○	―
10月	水辺で乾杯	○	×	×	―
10月	ソニー秋の美化活動	○	△	△	―
10月	コスモス祭り	○	×	×	―
12月	不知火コスモス種取り	○	△	○	―
1月	新そば祭り	○	×	×	―
3月	本明川クリーン作戦	×	×	△	―
通常開催「○」		14	0	3	―
一部開催「△」		0	5	5	―
中　止「×」		1	10	7	―
計		15	15	15	―

3.コロナ禍でのイベントの開催事例

コロナ禍において開催されたイベントについて、どのような工夫をしながら取り組んでいるのかいくつか事例を紹介する。

(1)桜づつみをきれいにせんば

「桜づつみをきれいにせんば」は４月上旬に毎年開催されているイベントで、主催は本明川交流会である。

コロナ禍前は約 300 名が参加して本明川にある桜づつみ公園の清掃や桜の植樹等を行い、清掃後は各団体が食べ物を持ち寄り、満開に咲いた桜を見ながらの懇親会が行われていた。

コロナ禍においては感染予防対策として大人数が集まるイベントの一切を中止し、本明川交流会の運営委員のみ約 20 名が参加し桜の植樹のみが行われた（写真-1）。

写真-1　少人数での桜の植樹

(2)本明川河川敷清掃美化活動

「本明川河川敷清掃美化活動」は10月上旬に開催されるイベントで、主催はソニーセミコンダクタマニュファクチャリング（株）長崎テクノロジーセンターである。

コロナ禍前は社員や関係者が参加して本明川河川敷の清掃活動が行われていた。また清掃後はケータリングカーにて参加者に食事が振る舞われ、河川敷で食事も行われていた。

コロナ禍においては参加者の定員を設けてマスク着用にて清掃活動が行われ、清掃後の食事はお弁当の配布のみとし、特に令和2年度は持ち帰って食べるようにされていた(写真-2）。

写真-2　マスクを着用しての清掃活動

(3)諫早湾干陸地・本明川クリーン作戦

「諫早湾干陸地・本明川クリーン作戦」は3月上旬に開催されるイベントで、主催は河川協力団体の拓生会である。

コロナ禍前は本明川及び諫早湾干陸地の計5か所の広範囲で一斉に清掃が行われ、約1,000名が参加していた。また清掃後はバーベキューなどの懇親会も行われていた。

コロナ禍の2019年度及び2020年度は中止。2021年度は拓生会会員の約30名のみの参加とし、市民全体への声掛けはせず干陸地（本明川下流地区）のみの清掃が行われた(写真-3）。

写真-3　参加人数を制限した清掃活動

(4)諫早大水害を語り継ぐ

「諫早大水害を語り継ぐ」は7月中旬に開催されるイベントで、主催は本明川を語る会である。諫早出張所はオブザーバーとしてイベントの企画、準備等から参加している。このイベントは1957年7月25日に発生した諫早大水害の恐ろしさを後世に伝え、災害に備えることの重要性を多くの方に伝えることを目的として毎年開催されている。

コロナ禍前は一般参加者を含めて約100名が参加し、こども達による当時の水害の様子を描いた劇や、水害や諫早についての歌曲の合唱、実際に水害を体験された方の体験者談などが2時間以上に渡って行われていた。

コロナ禍においては2020年度の開催が中止されたが、2021年度は様々な感染症対策がとられた上で開催された。具体的にどのような感染症対策がとられたのか、開催実現に向けて苦労した点や工夫した点も含めて次に紹介する。

a)コロナ感染症対策

感染対策の基本となるマスク着用や手指消毒、受付時の検温を実施した。また開催時間についてはコロナ禍前は2時間30分程度であったが、接触リスクの高い子供たちによる演劇をとりやめるなど行い1時間に短縮された。さらに感染リスクが高いと考えられた合唱団による生歌は取りやめ、過去の映像を上映することとした(写真-4)。一方参加人数は定員を設け入場制限が行われた。また会場内の座席の配置は前後左右に間隔を空けることで三密を回避し(写真-5)、受付においても分散化させ一か所に人が集まらないような対策がとられた(写真-6)。さらに万が一コロナ感染が発生した場合に備え、参加者には目的以外には使用しないことを事前に了承して頂いた上で連絡先の記入をお願いした。資料については受付ブースに人が滞留しないよう会場入り口で配布が行われた。

写真-4　感染症予防対策として生歌をやめ過去の映像を上映

写真-5　間隔を空けた座席の配置

写真-6　スタッフの間隔を広めに取り資料配付を別にした受付スペース

b) 開催時に苦労した点や工夫した点

準備を始めた当時は新型コロナウイルスが流行し、諫早市内のイベントもほぼ中止を決定する中、当イベントを中止にするのか直前まで判断がつかなかった。長崎県から発出される「感染段階対応の目安」を基に議論を重ねた結果、開催が可能であると判断しできる限りの対策を行った上でコロナ禍でもできる内容で実施しようという結論に至った。ただしコロナが感染拡大した場合はその時点で中止をするという中での開催準備となった。

特に苦労した点としては、開催決定までの遅れによる準備期間の不足と、コロナ感染症対策による準備品等の増加や開催スタッフの増員が必要になったことが挙げられる。

工夫した点としては、参加人数を制限したがより多くの方に諫早大水害の経験を知って頂くために新たな取り組みとしてYouTube配信を行ったことである。

４.コロナ禍で中止となったイベント事例

コロナ禍において中止となったイベントについて、どのようなものがあり、なぜ開催ができなかったのかを紹介する。

(1)諫早万灯川まつり

「諫早万灯川まつり」は毎年7月25日に開催されているイベントで、1957年の諫早大水害で犠牲となった方の追悼のまつりとして開催されている。慰霊の思いを込め、本明川河川敷に約2万3千本の万灯を灯し、2000発の花火を打ち上げるイベントとなっている。

このイベントには約50,000人の来場者が見込まれ複数箇所に人が密集することが予想されるため、三密の回避ができないこと等が難しいことから中止となった。

(2)本明川魚つかみ取り大会

「本明川魚つかみ取り大会」は7月下旬に開催されているイベントであり、本明川内に網を張りその中に魚を放して魚のつかみ取りを行う。これを通して子ども達の健全育成や河川愛護の心を育てることを目的として開催されている。

毎年約500人を超える参加者で盛況を博しているが、参加者が密集することは避けられないと判断し、参加する子ども達の「生命と健康」を第一に考え、中止となった。

５.コロナ禍で住民団体の方が感じたこと

コロナ禍で各住民団体が思うような活動ができない状況について、各住民団体の方がどのように感じているのか4項目について調査したので紹介する。

(1)大変だったこと、苦労したこと、できなくてストレスを感じたこと

・色々な行事を開催したいが、もし万が一クラスターが発生したらと思うと怖くてできない。
・コロナ感染状況が日々変化する状況なので、開催か中止の判断がしづらい。
・研修会開催に際しても県内各地からの参加のため、事務局として開催後１週間ほどの期間は感染者が出ていないか気が休まらなかった。

(2)団体内でのコミュニケーションの方法

・対面ではなくオンラインでの会議へ変更となった。
・全員が集まることはなくして役員会議のみとし、議決内容等は文書での通知とした。

(3)新たなチャレンジ、新しい取り組みを行った事例

・会員同士の情報共有手段としてLINEを活用するようになった。
・全国研修ではZoomを活用するようになった。

(4)これからの活動について

・以前のようなイベントをまず復活させたい。
・集合研修とZoomを利用した研修を併用して、効果的に開催したい。
・平均年齢が高いグループであり、一年一年がとても大切なので自分自身と家族の健康を守りつつ、継続的に活動を行っていきたい。
・以前のように他団体や国交省との懇親を深めたい。

６.おわりに

コロナ禍では様々な行動制限により各イベントや大人数での会議等が自粛されたことから、我々河川管理者が住民団体の方と顔を合わせる回数が減り、コミュニケーションが取りづらくなった。また本明川で活動する団体はご高齢の方が多く、オンライン会議の開催も難しかった。しかしその一方で住民団体とはその必要に応じて野外で距離を取って会うようにし、顔と顔をつきあわせて情報交換や意志疎通を行うよう心がけた。またコロナ禍で行っている住民活動については、少しでも多くの人に知って頂く手助けになればと考え、事務所のSNSへ投稿を行い広報支援に努めた。

イベント等は一度中止するとその段取りが分からなくなることから再開に向けたハードルが上がることが考えられる。今後の目標としては、充実した楽しい住民団体の活動を取り戻すためにも、まずは以前実施していた活動の復活を応援したい。そしてコロナ禍で実施したイベントの経験を踏まえ、各住民団体に寄り添ったアドバイス、提案、お手伝いをしていきたい。

参考文献

1)厚生労働省：オープンデータ陽性者数の感染者数（日別）